View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

人間福祉学研究　第７巻第１号　2014. 12

巻頭言

「人間福祉」断章

――福祉と歴史の間――

関西学院大学人間福祉学部長　室田　保夫

現代は如何なる状況で如何なる現実，世界があり，如何なる解決課題を俎上に載せようとしているのだろうか．21 世紀に入り，時代や社会が大きく変わり，様々な社会問題，生活問題が顕現し，出口の見えない閉塞状況に置かれている．日本だけでなく外国に眼を転じてみても，人間存在，若しくは「いのち」や生命の危機が顕現している．それは環境や自然破壊，災害，あるいは宗教や戦争，貧困といった福祉や政治が深くかかわっているものである．その根底には，人間が基本的に生きるということ，若しくは生存することが脅かされているといった危機状況である．こうした日々の生活が，生きる意味，人間の福祉として根本的に問われているのが現在でもある．かかる時代こそ，時代を相対化し，時間と空間「今，ここ」を正確に理解していかなければならない．その方法の一つが歴史的方法であろう．

E・H・カーが歴史を「現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話」（『歴史とは何か』40 頁）と把捉したように，歴史が事実の集積のみならず，解釈に力点が置かれるならば，過去の真実は時代と共に変わっていかざるを得ない．つまり過去は歴史家によって書き直されていくものでもある．上述のように大きな課題に直面する現代は世界史的にみても変革期であるということの証明なのかも知れない．E・H・ノーマンも「歴史家の仕事は写真屋の仕事よりはむしろ画家の仕事に似ている」（『クリオの顔』78 頁）と言っている．そうであれば現在は過去の光景を如何にキャンパスに描けばいいのだろうか，そして過去のものを如何に鑑賞すればいいのだろうか．

ここで，さしあたり「福祉（社会福祉）」という用語について考えてみよう．しばしば「福祉」という言葉は漢字の語源に依拠し，「幸福」「幸せ」といった言葉で説明される．それは英語の「welfare」「well-being」の訳語としても使用されてきた．また，社会福祉は広義（目的概念）と狭義（実体概念）に分けながら説明されたりもする．幸福を追究することであれば「幸福学」とも揶揄されるような危うい地平に立っている．福祉≒幸福という意味に解釈すれば，これは目的概念，達成されるべき理念，目標とされ，社会福祉が現代社会における実体概念として在る．そうした長い歴史的スパンの視野も必要である．

ところで人間存在の原初は共に暮らしていくこと，そして人々の助け合いであるということである．それを歴史という時間性で理解していくことが必要である．すなわち福祉という概念は時間という概念と共存してきたのである．ただ，それへの言葉が存在しなかったり，あるいは可視化されてこなかっただけである．マルクスの言う「類的存在」（社会的・共同的存在）としての人間は，人間の労働が中心になるが，人間は共に助けあうという遺伝子をも保持してきた．人間は常に自由意

思の発露として，公共性を希求してきたのである．ハンナ・アレントも『人間の条件』の中で「公共空間」とも表現している．換言すれば人間の倫理・道徳であり，社会的規範とも理解できる．すなわち，時代時代においてそれは大なり小なり機能してきたといってよい．それを検証するのが歴史の役目でもある

ところで現在，歴史学は戦後歴史学の中心であった講座派的な方法，視点が揺らぎ，民衆史，ジェンダー史，あるいはフランスのアナール学派の影響も受け，社会史，人口史，家族史の勃興に伴い多様化した時代となっている．歴史とは過去の無数の歴史的事実から，それを整序し，その真実を見極めていくことが求められていくものである．またそれは過去の研究のみならず，「すべての真の歴史は現代の歴史である」（クローチェ）と表現されたように，現代を投影するものでもある．ここには書き手が物語る価値観や問題意識が反映されていくものであり，その時代を生きる人々の「存在被拘束性」（K・マンハイム）という課題と連動するこというまでもない．

では「福祉にとって歴史とは何か」．社会の発見以来，慈善や救済は「社会」の事業となり，そして「社会福祉の時代」を迎え社会福祉学が誕生する．それは現代社会に生起する様々な問題にむかってその本質を問いながら，解決の方向性を探り，実践していく学問である．国家体制としては「福祉国家」「社会国家」という概念があり，一方で「福祉社会」として位置づけられたりする．したがって国家政策のみならず，公私にわたる様々な資源を利用しながら，あるいは新しい革新的な政策やソーシャルワークを中心にして支援方法を模索していく．そうした時，過去からの流れを整理する歴史はきわめて有効な方法である．また新しい視点や智慧のヒントも学ぶことが出来る．このように福祉を考えるとき，常に歴史的視点を必要とせざるを得ない．したがって「福祉にとって歴史とは何か」を考察していくことが，結果として「歴史にとって福祉とは何か」について考えていくことにつながっていくのである．

戦前，シカゴ大学に留学し，宗教と社会や経済の接点を探り，福祉の理論や思想史研究に貢献した竹中勝男はM・ウエーバーの課題にも取り組んでいる．戦前，彼の著わした『日本基督教社会事業史』（1940）はその点で福祉の思想史的課題に向き合ったものである．「福祉の思想」は社会改革の発露を包含し，人間の叡智が披見され，未来への可能性を探ることが出来る．また戦後上梓した『社会福祉研究』（1950）では福祉の把握の仕方として，社会福祉を上位の一つの「目的概念」という視点を提起し，「人間の幸福追求（Wille zum Wohlfahrt）の歴史的共同的体験」（190 頁）と捉えた．つまり，広義の把握の仕方には，人類が目的として理念，価値と向き合っていくという表象である．

戦後，社会福祉史研究の開拓者吉田久一は実証主義を重んじながらも，「マルクスとウエーバー」的課題に向き合った．それは社会福祉が常に人間の存在や価値を無視することが出来ないという性格に基因する．つまり下部構造の経済史を中心にした研究方法だけでは社会福祉の歴史が描ききれないという危惧からである．これに関し吉田は『日本貧困史』（1984）の中で「社会福祉の持つ『生活性』や『人間性』，とくにその実践的性格からして，総合的視点を用意しなければならない」（5 頁）と論じている．この視点は現在でも重要な指摘である．

ところで，網野善彦と宮田登は『歴史の中で語られてこなかったこと』（1998）という著において，生活を重視する民俗学と時間を重視する歴史学との接点について指摘する．その副題にあるように「おんな・子供・老人からの『日本史』」の視点である．フランスのアナール学派がフランス民俗学の影響をもっている．日本では柳田学への関心，評価があり，ここには変化するものと変化しないものの学問的溝から対話への可能性を引出して，新しい何かを希求しようとする意欲を窺うことができる．福祉は人間や生活と関わる課題であり，

したがって生活の基底と関係を持つ福祉史は日常への関心＝歴史学が見てこなかったものへのアプローチが必要である．そして生活や生存への関わりをみていくことから，その可能性を秘めている．

一人一人の人間を如何に描くかという方法が，福祉の歴史に求められているのである．その一人一人を大切にするということは，過去の人間の生活，生存，そして「死」をも包含した生き様の確認でもあり，そのことは我々が今，現状を分析し未来を見つめていくことにつながっていくことになる．その為には書かれた文字史料のみだけでなく，聞き書きや人々の「記憶」と言ったことも大切にしなければならない．柳田國男が民俗学にこだわったのも，かかる関心からでもあろう．歴史の中に名もなき人間を見ることの重要性は，人間の中に歴史をみることと密接につながっているのである．それは「自分の中に歴史をよむ」（阿部謹也）といったことにも連動する．

このように常に「福祉」を考えていく時，「福祉にとっての歴史」「歴史にとっての福祉」ということを念頭において置かなければならない．そしてそこには人間に対する深い洞察力が必要である．とりわけ我々が対象の広い人間福祉（学）に共通する諸々のミッション，領域，目標，課題を保持している故，そうしたものに横串を入れる方法として，確たる人間や社会への理解と共に歴史的視点が必要不可欠であるように思われる．そして西洋史家の二宮宏之が言うように，常に「全体を見る眼」の視点がなければならないことはいうまでもない．

2015 年 1 月には阪神淡路震災も 20 年の節目を迎え，我々はその内実を共有しておかなければならない．また東日本大震災の体験や経験，記憶，そして復興への努力も記録されなければ未来につながらない．それは遠い過去の人々の体験と未来に生きる人々の架橋である．さしあたり，今を生きる我々はノーマンの言う「画家」を目指していくことも必要であろう．換言すれば，50 年後，100 年後には，「現在」が「過去」のものとして描かれていくのである．そのとき，現在の福祉状況はどのような絵となって表現されているのだろうか．とりわけ，人間と福祉の光景においてである．